筑波学院大学紀要第１集　15～27ページ　　2006年

社会力の構成要素と学力との関連性に関する試論

― 東海村「テレビ視聴と生活態度に関する調査」の結果分析をもとに ―

門脇　厚司*

An Analysis of the Relation of Social Competence and Academic Achievement

— On the Based of Survey on TV Viewing Activity of Children in Tokai Area of Ibaraki Prefecture —

Atsushi KADOWAKI *

Abstract

As a result of survey on children 's TV viewing activity, we find out several facts concerning to the basic components of social competence and the relation of children's social competence and academic achievement. These facts are followings.

1)The components that consist of social competence are five factors. These five factors are ① confidence to adult, ② consideration for others, ③ intelligent curiosity, ④ interest in unfamiliars, ⑤ trust to human beings.

2)The most important factor that consists of child social competence is confidence to adults and interaction with others.

3)High social competence children tend toward to get high achievement in school lesson.

4)The longer children view TV program, the less the level of social competence of children.

キーワード：社会力、社会力の構成要素、学力、テレビ視聴、社会力と学力との関係

はじめに―若い世代の何が変化したのか―

このところ、子どもや若者の変質や異変に言及する論説や言説が多くなっている。非行の若年齢化、他者への思いやりや豊かな心の欠如、社会性やコミュニケーション能力の未

＊　情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

発達、学習意欲と学力の低下、などがそうした論議の中心をなしている。このような言説が多くなるにつれ、子どもの変化を科学的に考究しようとする多くの学会が創設されている。日本赤ちゃん学会、日本子ども学会、日本子ども環境学会、日本青少年育成学会、などがそうした一例である。かつて、良心的かつ進歩的であることを自負していた人ほど「子どもの本質は変わらない」と言い張っていたと記憶するが、子どもや若者をめぐる近年の数々の事件や現象、それに子どもや若者を対象に行った各種の調査結果や研究報告は、そのような識者の子どもに対する見方を変えさせることになったのだといえる。

子どもたちの変質を認めざるをえなくなったとして、では、若い世代の何が変わったのか。雑巾が絞れない子や箸が使えない子が多くなった、といった類のレベルから、自己中心的で人間関係の取り方が下手で嫌がるとか、広範性発達障害を呈する子が多くなった、といったレベルまで、指摘される事柄は多岐にわたり、次元も一様ではない。因みに、筆者は、20年以前から子どもに異変が生じていると言い続けてきた。そして、異変の核心を言葉にすれば、「他者の喪失」と「現実の喪失」になるとしてきた[1)]。

一昨年（2004年）６月に長崎県佐世保市の小学校で起きた「クラスメイト殺人事件」を契機に、文部科学省の初等中等教育局は、昨年（2005年）１月、「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」（座長：有馬朗人）を組織し、子どもの心が変化したとして、心の変質の核心は何であるかを、進展著しい脳科学によって明らかにされた知見などをもとに考究することに踏み切った。雑多な諸々の見方に現時点で一つの決着をつけようという意図にもとづいたプロジェクトであるといえる。筆者も検討会のメンバーとして参加したが、ほぼ９ヶ月の検討を終え、2005年10月初旬にまとめられた報告書で提示された知見や提言の中心になっているのは次のようなことである[2)]。

（１）子どものこころの健全な発育のためには適切な愛着形成が重要である。（それゆえ）愛着を考慮して、乳幼児期から対人関係能力や社会的適応能力を涵養する教育が重要である。

（２）子どもが安定した自己を形成するには、他者の存在が重要である。（それゆえ）他者と出会い、他者を他者として受け入れ、他者と自分の違いを体験・認識し、その他者との違いがある自己を体験することが重要になる。

（３）情動は、生まれてから５歳くらいまでにその原型が形成されると考えられるため、子どもの情動の育成のためには乳幼児教育が重要である。

（４）前頭連合野や大脳辺縁系の機能が子どもの健やかな発達に重要な役割を果たしている。前頭連合野の感受性期は８歳くらいがピークで20歳くらいまで続くと思われ、その時期に、社会関係をきちんと教育・学習することが大切である。

このような知見で意味し提言をもって言わんとしているところを自分なりに集約し言語化すれば、筆者が造語し用いてきた「他者の喪失」であり、「社会力の衰弱」であり、また、社会力のおおもとである他者への関心、愛着、信頼感を形成するには生後直後からの他者との相互行為がきわめて重要なことである、と言い切っていい。検討会で「他者の喪失」とか、「社会力のおおもと」といった言葉を用いて表現するよう求めなかったのは、文部科学省の面子を慮り、他の委員の存在を配慮してのことである。

検討会の報告書がどのような表現をしたにしろ、心理学者、社会学者、脳科学者、児童精神科学者たちが互いの研究を踏まえて意見交換した結果、近年の子どもの成長発達の過

程に見られる変質について上記のような見解で一致をみることができたことは、今後の子どもへの対応の仕方と、学力向上の大合唱が渦巻いているわが国の教育の在り方について再考し論議する上で極めて意義深いことであり重要なことである。

このような認識を踏まえ書かれる本論が意図するところを端的に言えば、（１）衰弱している「社会力」の中身を調査結果を踏まえ実証的に検討することであり、（２）社会力の程度と学力なるものとの間にどのような関連性があるかを、同じく調査の結果をもとに、吟味し考察してみることである。併せて、（３）テレビ視聴と学習態度と成績との関連について若干の検討を加えてみることにしたい。

１．調査実施の概要と方法および回答者数

上記の意図に従い、調査データの分析を進めるが、その前に、行った調査についてその経緯と概要を説明しておくことにする。

原子力の村として知られる茨城県東海村は1999年９月、JCO の事故に見舞われ放射線で汚染された村としてイメージを損ねることになった。悪しき風評の中で肩身の狭い思いをして勉学することになった村の子どもたちを元気づけ、誇りの持てる村にすべく、東海村は青少年を健やかに育てる運動を開始した。そうした運動の一環として2004年４月から行うことになったのが「毎週土曜日をテレビをみない日」にする、いわゆる「ノー・テレビ・デー」の運動であった。村長の要請に応じて村のアドバイサーを引き受けていた筆者は、運動を開始する前の子どもの状態を把握しておくことを目的に実態調査を行うことを提案、実施することになった。実施の時期、対象者および対象者数、回答者数および回答率、調査方法は次の通りである。

１）調査対象者：東海村の全ての保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に籍を置く全ての乳幼児および児童生徒。（但し、乳幼児については保護者が回答）

２）調査時期：2004年４月。

３）回答者数および有効回答率：乳幼児512名（99.0%）、小学生1744名（99.2%）、中学生542名（99.7%）、高校生463名（98.6%）

４）調査票の作成および調査の方法等：調査票は乳幼児用、小学校低学年（１，２年生）用、小学校高学年（３，４，５，６年生）用、中学生用、高校生用の５種類を作成し用いた。

調査は保育所、幼稚園、小・中・高校とも、それぞれの所・園・校に調査票を渡し調査を依頼した。乳幼児の場合は保護者に調査票を預け自宅で記入してもらい回収する方法を取った。小学生以上の場合は、各学校で調査の時間を設けてもらい、その時間帯に本人に記入してもらう方法を取った。

こうして回答してもらった調査票は総計3261票に上る。これらをすべてのデータをコンピュータに入力、コンピュータによる分析作業は共同研究者であった筑波大学教育社会学研究室の大学院生が行った。得られたデータのうち、本論の目的のために分析の対象にしたのは、小学校上級生1138名分と中学生、高校生計2143名分である。

２．社会力の測定方法と内部構造の検証

調査結果の分析に入ることにするが、まず行うのは社会力の内部構造の検討・検証である。社会力なる資質能力がどのような構成要素によって成り立っているかを確認してみることである。

「社会力」なる概念は、1999年12月に出版した岩波新書『子どもの社会力』を執筆にす

るに当たり、新しい概念として筆者が造語したものである。社会力という概念で意味させようとしている内容とは、端的に説明すれば、人が人とつながり社会をつくる力のことであり、さらにはよりよい社会を作ろうという意欲のことであり、よりよい社会を思い描く構想力であり、構想したことを実際に実現する実行力のことである[3)]。

関連してさらに付け加えておけば、社会力のおおもとは他者への関心、愛着、信頼感であり、このような社会力のおおもとは乳幼児期から生きた生身の人間、とりわけ大人との相互行為の繰り返しによって培われ強化されるものである、とも説明してきた。若い世代に著しく欠けてきているのが、まさにこのような意味の社会力であることは本論の冒頭でも指摘したことである。

２－１．社会力の測定と測定項目の妥当性の検討について

社会力がこのような資質能力であることが社会的に広く認知され認識されるにつれ、わが子の社会力がどの程度であり、わが学校の児童生徒の社会力がどのレベルにあるかを知りたくなるのは当然の成り行きである。また、社会力の違いがどのような行動の違いになって表れるのか、社会力なる能力は人間の他の能力とどのように関連しているのか。社会力なる能力の存在が認知され、その有無が人間を知る上で有効であり重要であることが認められるようになるにつれ、このような能力を測定したくなりその方法の開発が求められるようになるのも事の必然といえる。

このような要請に応えて、筆者が最初に社会力を測定するための診断テストの項目を作り、小学生を対象に実施したのが2000年12月であった。20項目からなる診断テストの内容と、その結果の全容は『学研版・小学生白書2000－2001年版』に公表されており、後に、拙著『社会力が危ない！』（2001年、学習研究社）、『社会力がよくわかる本』（2005年、学事出版）にその一部を掲載している[4)]。

しかし、社会力を測定するために作成した診断テストで用いた20の項目が、社会力を測定するために妥当な内容であるかどうかの検討はいまだせぬままに今日に至っている。その後、一橋大学を中心とした研究グループで行った小学生、中学生、高校生を対象に行った調査でも新たに小学生版、中学生版、高校生版の社会力診断テスト項目を開発し調査を実施しているが結果の分析はこれからという段階にある。また、大学生版を作り、筑波学院大学の第１期生全員を対象に社会力診断テストを実施しているが、この結果もいまだ未処理である。一般社会人を対象に社会力を測定する社会人版も開発済みであるが、この調査の実施と結果の分析は2005年秋から翌2006年春にかけてのことになり、当然、結果の分析・検討は未だしである。

社会力測定項目の妥当性にかかる検討検証作業がこのような段階にある中で、ようやく本格的な検討検証を加えることになったのが、東海村で実施した『テレビ視聴と生活態度に関する調査』（以下、東海村調査）の調査結果のデータである。いうまでもなく、社会力の内部構造の検証と、社会力測定項目としての妥当性を検討した結果を公表するのも本論文において最初のことである。

２－２．解析手法と社会力の内部構造の検討

社会力の程度を測るための質問はどのようにして考え作ったか。社会力があるとはどういうことか、社会力のある人間にはどのような行動を取る傾向が見られるのか、社会力豊かな人間の人間としての特徴はどのような形になって表れるのか。こうした問いに、予め想定したイメージをもとに、それを言葉にして答えることができる。そのようにして答えた言葉（ワーディング）が社会力を測定する目的で作った調査項目である。ここで分析

データとして用いた東海村調査の小学上級生用、中学生用、高校生用の調査項目は同じ内容で23項目からなる。23項目の内容は、単純集計結果とともに表１にすべて掲載してある。

では、この23項目は、社会力なる資質能力を測定する項目として妥当なものか。妥当性を検証するには想定し用いた項目それぞれが、互いに無関係ではなく、強く関連し合っており、かつまた次元が同一であることを確認する必要がある。また、そうした検討を加えることによって、社会力なる資質能力がどのような要素（因子）によって形作られて（構成されて）いるかを確かめ理解しておく必要がある。そのような確認作業を行う手法として開発された代表的な多変量解析手法に林式数量化理論第３類と因子分析法があるが、ここで用いた手法は、簡便でありかつもっとも一般的に用いられている因子分析法を用いた。中学生と高校生の回答の回答をもとに行った因子分析の結果を表にしたのが表２である。

以下、こうして得られた結果をもとに社会力を構成する要素と、社会力なる資質能力の

表１　「社会力」に関する質問項目と単純集計結果

（%）

	小学校				中学校			高等学校			合計
	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
困っている人を見ると、すぐに助けたくなる	68.7	65.8	64.5	65.5	65.3	48.8	52.1	45.6	42.1	48.5	59.6
友だちが何か失敗したら、励ましてあげる	75.9	78.2	78.2	79.7	83.4	76.2	80.3	75.6	81.1	78.1	78.6
友だちが何かしてくれたら、必ずお礼を言う	94.0	93.1	91.6	91.2	95.4	93.6	96.5	94.4	93.1	92.3	93.3
相手の気持ちをよく考えてつきあう	72.7	71.8	71.3	71.6	80.7	76.2	82.4	75.0	77.4	82.8	75.2
引き受けたことは、最後までやりとおす	73.7	73.0	75.1	78.4	76.8	68.0	76.1	62.5	64.8	72.8	73.0
相手が話すことを、きちんと聞く	73.7	72.1	70.1	76.7	81.1	75.0	76.1	78.1	70.4	75.1	74.6
誰にでも親切にしてあげる	73.0	66.7	66.4	63.2	66.4	61.6	71.1	63.8	54.7	60.4	65.5
知らない人とでもすぐに仲良くなれる	57.1	49.7	53.6	54.1	61.4	43.6	44.4	41.3	28.9	34.9	49.3
ひとりでいるより、大勢の人といるほうが好き	86.5	79.3	83.5	77.7	77.6	73.8	62.0	70.6	65.4	57.4	75.9
他の人の話を聞くのが好き	62.7	57.8	57.6	57.8	62.9	59.9	60.6	76.3	66.7	75.7	62.5
体を動かして、汗を流すのが好き	67.4	72.1	69.8	68.9	71.8	67.4	69.7	61.9	57.2	56.2	67.4
知らないことは、他の人に聞いて教えてもらう	78.1	75.0	78.8	75.0	76.1	75.6	76.1	74.4	64.2	77.5	75.6
お父さんやお母さんといろんな話をする	85.9	82.8	81.6	74.7	73.4	51.2	55.6	48.8	40.3	43.2	69.0
近所の大人の人ともよく話をする	38.9	35.1	30.5	22.0	27.4	14.0	21.1	20.0	11.9	13.6	25.9
地域によく知っている大人が何人かいる	53.9	55.2	55.1	50.0	47.5	37.2	46.5	35.6	33.3	29.0	47.0
信頼できる大人が身近に何人かいる	65.8	64.9	67.6	62.2	51.0	42.4	51.4	39.4	32.7	33.7	54.9
大人と話をしたり、一緒に何かをしたりするのが好き	71.2	59.2	52.3	41.6	38.6	20.9	23.9	20.6	16.4	26.0	42.5
大人の人に教えてもらいながら、一緒に何かをしたりするのが好き	72.1	64.4	57.9	46.3	38.6	26.2	26.8	18.8	13.8	26.0	45.0
やったことがないことは、何でも自分でやってみたくなる	70.2	70.4	66.4	61.1	59.5	47.7	49.3	46.3	32.1	43.2	58.3
知らないことがあると、誰かに聞いたり、自分で調べてみたくなる	65.8	59.8	60.1	58.1	59.5	50.0	50.7	40.0	34.0	51.5	55.4
他の人がやっていることは、何でも自分もやってみたくなる	67.7	66.4	62.9	54.7	51.0	45.9	45.8	38.8	27.7	39.6	53.7
事件のことをニュースで聞くと、どうしてこんなことが起きるのだろうと、あれこれ考える	56.7	52.9	51.7	51.4	54.1	41.9	46.5	36.3	39.6	44.4	49.3
他の国の人の悲しいニュースを聞くと、自分も悲しくなる	47.0	43.7	47.0	47.0	47.1	35.5	47.2	40.6	40.3	48.5	44.9
度数（人数）	319	348	321	296	259	172	142	160	159	169	2345

注）「とてもよくあてはまる」と「かなりあてはまる」の合計

内部構造を検討することにする。

結果から、社会力なる資質能力は、第１因子から第５因子まで、大きく５つの要素から構成されていることが確認できる。各因子を構成する質問項目を吟味しそこに共通する内容を読み取ることで、社会力なる資質能力を特徴づける要素を理解することができるが、ここでは読み取りのための細々とした過程の記述は省略し、社会力を構成する５つの因子（要素）について結論のみ解説するだけに止めたい。

２－３．社会力を構成する５つの要素

社会力を構成する５つの要素（因子）それぞれの特徴ないし性格を表すに相応しい名前をつけ、それぞれの特徴を整理し説明すれば以下のようになる。

第１の要素（因子）；

「大人への信頼と親近感」…第１因子を構成する項目に共通する内容は大人との日常的な交わりと、大人との交流によって培われる大人への親近感であり大人への信頼感である。社会力の有無や程度を左右する第一の要素は、大人を「意味ある他者（significant

表２　「社会力」を構成する因子（因子分析結果／全体）

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子
	大人への信頼感	他者への配慮	知的好奇心	未知の人への関心	人間への信頼感
大人と話をしたり、一緒に何かをしたりするのが好き	0.777	0.100	0.243	0.074	0.094
大人の人に教えてもらいながら、一緒に何かをするのが好き	0.708	0.086	0.314	0.124	0.106
信頼できる大人が身近に何人かいる	0.692	0.160	0.073	0.138	0.088
近所の大人の人ともよく話をする	0.639	0.099	0.105	0.117	0.175
地域によく知っている大人が何人かいる	0.616	0.127	0.078	0.115	0.167
お父さんやお母さんといろんな話をする	0.542	0.237	0.221	0.079	0.054
相手の気持ちをよく考えてつきあう	0.064	0.652	0.060	0.196	0.150
相手が話すことを、きちんと聞く	0.091	0.626	0.161	−0.005	−0.038
引き受けたことは、最後までやりとおす	0.172	0.590	0.222	0.046	−0.028
誰にでも親切にしてあげる	0.193	0.581	0.087	0.172	0.209
友だちが何か失敗したら、励ましてあげる	0.136	0.534	0.039	0.280	0.393
友だちが何かしてくれたら、必ずお礼を言う	0.132	0.507	0.075	0.118	0.240
困っている人を見ると、すぐに助けたくなる	0.247	0.409	0.101	0.348	0.340
他の人の話を聞くのが好き	0.064	0.398	0.241	0.092	0.232
知らないことがあると、誰かに聞いたり、自分で調べてみたくなる	0.209	0.221	0.641	0.238	0.029
やったことがないことは、何でも自分でやってみたくなる	0.253	0.134	0.612	0.125	0.172
他の人がやっていることは、何でも自もやってみたくなる	0.222	0.121	0.589	0.142	0.233
知らないことは、他の人に聞いて教えてもらう	0.148	0.263	0.366	0.031	0.229
他の国の人の悲しいニュースを聞くと、自分も悲しくなる	0.215	0.257	0.155	0.635	0.071
事件のことをニュースで聞くと、どうしてこんなことが起きるのだろうと、あれこれ考える	0.215	0.171	0.314	0.599	−0.046
知らない人とでもすぐに仲良くなれる	0.247	0.155	0.204	0.056	0.465
ひとりでいるより、大勢の人といるほうが好き	0.168	0.186	0.223	−0.065	0.460
寄与率（%）	14.6	12.7	8.5	5.6	5.1

注）主因子法／バリマックス回転
※「体を動かして、汗を流すのが好き」という質問は、回答者によって多様な解釈が可能になるため、因子分析から除外。

others)」として取り込んでいるか否かである、ということを示唆している。

第２の要素（因子）；

「他者への配慮と思いやり」…第２因子を構成する項目に共通して見られる特徴は、他の人のことに対する心遣いや思いやりが強いことである。他者と共にいることが喜びになり、他の人のためになることをするのが当たり前になっていることが社会力がある人間であることの証しであることを示唆している。

第３の要素（因子）；

「旺盛な知的好奇心」…第３因子は、まだ知らないことや、これまでやったことがないことに対する旺盛な好奇心であり興味関心の強さであるといえる。社会力ある人間は、学習意欲や挑戦意欲、達成意欲も強い人間であることを教えている。

第４の要素（因子）；

「見知らぬ人への関心」…第４因子になると説明力（寄与率）がかなり弱くなるが、その特徴は、未知の人々への関心が強く、「社会学的想像力（sociological imagination)」があることである。このような特徴は、身近にいる人間に親近感を持ちかつ信頼を寄せている人間は、未だ出会ったことがない人々にも関心を寄せ、それゆえ関連情報にも敏感である人間であることを示唆するものである。

第５の要素（因子）；

「人間への信頼感」…第５因子になると説明力が一層弱まり、その特徴がわかりにくくなるが、人間一般への親近感と信頼と理解であるとしてよいだろう。社会力のある人間は、見知らぬ人への警戒心がなく、誰とでも心を開きオープンマインドな心で付き合うことができる人間であり、人間を基本的に信頼している人間であることを教えている。

因子分析の結果を上のように整理し改めてその重要性を思い知らされるのは、子どもたちが社会力ある人間として人間形成できるかどうかを左右するのが、大人との付き合いや交流がどれだけ多く頻繁になされているか、ということである。筆者は、これまでも、「子どもの本当の友だちは大人である」と繰り返し言ってきたが、今回の結果はその主張が正しかったことを裏付けるものである。

また、社会力ある人間は、他者への配慮にも長けている人間であり、他者への配慮が長けた人間は、（それを可能にする良質な脳が形成されており、その結果として）知的好奇心が旺盛な人間でもあり、そのことは強い学習意欲となって表れ、学力を向上させることにもなっていることを示唆するものである。この点については次項で改めて検討することにする。

３．社会力と成績との関連性に関わる検討

第２項２－１で触れたように、『学研版・小学生白書』では、小学生を対象に社会力診断テストを行い、その結果をもとに社会力の程度の高い児童から低い児童まで３つの群に分け、それぞれの群の成績との関連性を検討してみた。その結果から、社会力が高いと判定された小学生群は、学校に行くのが好きで、授業も良くわかり、成績を良くしたいと考えており、実際にいい成績を取っており、家での勉強時間も多いことを確認することができた。

では、中学生と高校生でも同じような結果を確認することができるだろうか。東海村調査の結果をもとに、小学校３年生以上高校生までの児童生徒について改めて社会力と成績との関連性を検討することにする。

３－１．社会力診断テストにもとづく社会力の得点化

社会力と成績との関連性を検討する前段階として、まず、生徒個々の社会力がどの程度であるかを測定し、その程度を数値で表す必要がある。そこで、本項は、社会力の程度の

違いが学力ないし成績の違いとなって表れるかどうかを比較するための得点化のために行った手順とその結果を記述することで費やすことにする。

社会力の程度を数値化する考え方と、数値化する手順は比較的単純なものである。数値化の手順を順を追って説明すれば以下のようになる。

（１）社会力診断テストに用いた23項目のうち、「体を動かして汗を流すのが好き」という社会力との関連性が薄いと判断された項目を除く22項目について児童生徒個々がどう回答しているかをみる。

（２）回答の仕方の違いとなって表れる社会力の程度を一つの数値として表すための方法として加重平均値を算出する。

（３）加重平均値を算出するために、各回答に次のようなウエイト値（重みづけを表す数値）を与える。

a.「とてもよくあてはまる」…＋10点
b.「かなりあてはまる」…＋５点
c.「あまりあてはまらない」…－５点
d.「まったくあてはまらない」…－10点

（４）次のような計算式で加重平均値を算出する。

$10a+5b+(-5)c+(-10)d / (a+b+c+d)$

上記の手順で求められる数値は、計算式の理屈からわかるように、最高値が＋10点であり、最低値が－10点となる。加重平均値として算出された得点が＋10点に近いほど社会力のレベルが高いことを意味し、－10点に近くなるほど社会力が低い（ない）ことを意味する。

こうして得られた加重平均値を小学３年生から高校３年生まで男女別にそれぞれの平均と度数（人数）を整理し表にしたのが表３、表４、表５である。

見られる通り、概して、男子より女子の方が社会力が高く、小学生、中学生、高校生と上級の学校に行くほど社会力が低下していくことが読み取れる。

３－２．社会力水準と成績自己評価および学習意欲との関連性

では、社会力の水準と成績および学習意欲との間に何らかの関連性がみられるのか。成績との関連といってもここで検討するのは「今の自分の成績がよいほうだと思います

表３　社会力得点表（１）（小学生／学年男女別）

学年	性別	平均値	度数
3年生	男子	4.03	150
	女子	4.57	144
	合計	4.29	295
4年生	男子	3.96	168
	女子	3.92	157
	合計	3.94	325
5年生	男子	4.03	150
	女子	4.68	142
	合計	4.33	295
6年生	男子	3.28	131
	女子	4.25	134
	合計	3.75	268
合計	男子	3.85	599
	女子	4.35	577
	合計	4.08	1183

表４　社会力得点表（２）（中学生／学年男女別）

学年	性別	平均値	度数
中1	男子	1.88	96
	女子	2.74	138
	合計	2.32	238
中2	男子	－0.24	70
	女子	1.41	97
	合計	0.72	167
中3	男子	0.48	61
	女子	1.95	76
	合計	1.30	137
合計	男子	0.85	227
	女子	2.13	311
	合計	1.57	542

か。」という質問に対する回答で、教科に関する問題を作りそれへの解答を点数化した結果との関連ではないことは断っておかなければならない。それゆえ、厳密に言えば、社会力と成績の自己評価との関連性の検討ということになる。検討のために、小学生については３年生から６年生まで学年ごとに、中学生と高校生については全学年をまとめ、成績の自己評価ごとの社会力得点を一覧表にしたのが、表６と表７である。

高校生の結果にやや整合性に欠けるきらいがあるものの、小学生と中学生については成績がよいと自己評価している児童生徒ほど社会力の得点が高くなっていることが確認できる。社会力がある児童生徒ほど学校の成績もよいと見做してよい結果である。

では、学習意欲との関連はどうなのか。学習意欲の違いについては、「これからもっと勉強したいと思いますか。」という質問への回答を用いた。学習意欲についても、学習意欲の違いごとに社会力得点を示したのが表８と表９である。

学習意欲と社会力との関連では、小学生にやや整合性に欠ける学年が見られるが、中学生と高校生も含め、学習意欲が強い児童生徒ほど社会力のレベルが高くなっている。社会力がある児童生徒は学習意欲も高いと判断してよいことが確認できる。

社会力と学力との関係そのものの関連性を検討検証することを目的にした調査ではなかったこともあり、限定されたデータの分析と検討の結果ではあったが、概ね、社会力と学習意欲と成績との間にはプラスの相関があると見做してよい結果であった。なぜこのような結果になるのか。社会学および脳科学の知見をもとにいずれそのメカニズムを解き明かし理論化を試みたいと考えているが、東海

表５　社会力得点表（３）（高校生／学年男女別）

学年	性別	平均値	度数
高1	男子	−0.46	55
	女子	1.26	95
	合計	0.68	151
高2	男子	−0.60	50
	女子	−0.17	102
	合計	−0.30	153
高3	男子	−0.44	61
	女子	0.91	100
	合計	0.40	161
合計	男子	−0.50	166
	女子	0.65	297
	合計	0.26	465

表６　社会力と成績（自己評価）の関連表（１）（小学生／学年別）

学年	今の自分の成績がよいほうだと思いますか	平均値	度数
3年生	とてもよいほうだと思う	5.94	39
	まあよいほうだと思う	4.22	206
	あまりよくないほうだと思う	3.20	41
	よくないほうだと思う	2.48	5
4年生	とてもよいほうだと思う	5.63	30
	まあよいほうだと思う	3.91	215
	あまりよくないほうだと思う	3.34	67
	よくないほうだと思う	3.65	10
	とてもよいほうだと思う	5.34	23
5年生	まあよいほうだと思う	4.35	190
	あまりよくないほうだと思う	4.03	65
	よくないほうだと思う	3.95	13
6年生	とてもよいほうだと思う	4.82	16
	まあよいほうだと思う	3.86	162
	あまりよくないほうだと思う	3.43	70
	よくないほうだと思う	3.04	17

表７　社会力と成績（自己評価）の関連表（２）（中学生・高校生／学年別）

	今の自分の成績がよいほうだと思いますか	平均値	度数
中学校	とてもよいほうだと思う	2.49	16
	まあよいほうだと思う	2.23	219
	あまりよくないほうだと思う	1.22	237
	よくないほうだと思う	0.32	68
高校	とてもよいほうだと思う	−0.34	11
	まあよいほうだと思う	0.78	95
	あまりよくないほうだと思う	0.30	226
	よくないほうだと思う	−0.14	132

村調査においても、学習研究社との共同調査で得られた結論と同じ結論が得られたことをもってよしとしておくことにしたい。

４．テレビ視聴態度と社会力との関連性の検討

最後に、テレビ視聴態度と社会力との関連性についても若干の検討を加えておくことにする。テレビの視聴態度といっても各様である。現に、この調査でも、「勉強しながら見ている」とか、「一人で見ている」とか、「家族の誰かと一緒に見ている」とか、いくつかの質問項目を用意し聞き取っているが、ここではテレビを「だらだら見ているかどうか」と社会力との関連性のみ検討する。テレビをだらだら見ている児童生徒ほど、視聴時間が長くなり、その分、他の行動、例えば、家で家族と話し合うとか、家事を手伝うとか、地域でボランテイア活動に励むなど、社会力を高める時間が少なくなり、その分、社会力が相対的に低くなると予想できるからである。

表８　社会力と学習意欲の関連表（１）（小学生／学年別）

学年	これから、もっと勉強したいと思いますか	平均値	度数
3年生	もっともっと勉強したい	5.36	87
	もっと勉強したい	3.84	144
	あまり勉強したくない	3.73	58
	ぜんぜん勉強したくない	4.46	2
4年生	もっともっと勉強したい	5.76	55
	もっと勉強したい	3.98	178
	あまり勉強したくない	2.88	82
	ぜんぜん勉強したくない	2.17	7
5年生	もっともっと勉強したい	6.00	55
	もっと勉強したい	4.15	136
	あまり勉強したくない	3.59	93
	ぜんぜん勉強したくない	4.42	9
6年生	もっともっと勉強したい	4.52	49
	もっと勉強したい	3.96	134
	あまり勉強したくない	3.08	74
	ぜんぜん勉強したくない	2.72	8

表９　社会力と学習意欲の関連表（２）（中学生・高校生／学年別）

	これから、もっと勉強したいと思いますか	平均値	度数
中学校	もっともっと勉強したい	3.38	101
	もっと勉強したい	1.69	293
	あまり勉強したくない	0.05	135
	ぜんぜん勉強したくない	−0.40	11
高校	もっともっと勉強したい	1.36	45
	もっと勉強したい	0.76	139
	あまり勉強したくない	0.07	209
	ぜんぜん勉強したくない	−0.82	72

表10　社会力とTV視聴態度の関連表（１）（小学生／学年別）

学年	TV視聴の態度：だらだら見ている	平均値	度数
3年生	いつもそうしている	3.85	27
	ときどきそうしている	3.42	74
	たまにそうしている	4.07	114
	ぜんぜんそうしていない	5.64	66
4年生	いつもそうしている	3.35	38
	ときどきそうしている	3.12	86
	たまにそうしている	4.28	122
	ぜんぜんそうしていない	4.69	68
5年生	いつもそうしている	4.18	38
	ときどきそうしている	4.07	76
	たまにそうしている	4.05	113
	ぜんぜんそうしていない	5.30	63
6年生	いつもそうしている	3.54	40
	ときどきそうしている	3.64	83
	たまにそうしている	3.87	93
	ぜんぜんそうしていない	4.12	43

表11　社会力とTV視聴態度の関連表（２）（中学生・高校生／学年別）

	これから、もっと勉強したいと思いますか	平均値	度数
中学校	いつもそうしている	0.45	84
	ときどきそうしている	1.36	198
	たまにそうしている	2.17	186
	ぜんぜんそうしていない	1.78	61
高校	いつもそうしている	−0.31	154
	ときどきそうしている	0.15	140
	たまにそうしている	0.98	131
	ぜんぜんそうしていない	0.69	31

このような予想が的を射たものであるのかどうか。このことを検討するために、テレビを「だらだら見ている」程度ごとに社会力得点を整理した表を作ってみた。その表が表10と表11である。

成績の自己評価と社会力との間に見られたほどにははっきりした傾向はみられないが、それでも、小学生から高校生まで、テレビをだらだらと見ていない児童生徒ほど社会力が高くなる傾向があることは確認できる。しかし、テレビ視聴態度は、普段の生活態度全般との関連が強く、テレビ視聴態度だけで社会力との関連を云々するのは早計であることを付け加えておく必要があろう。

おわりに－若干の考察と今後の追証研究について

以上、東海村調査の結果をもとに社会力の構成要素（内部構造）と社会力と成績との関連性を検討してきたが、ほぼ筆者の仮説を確かめうる結果が得られたといえる。しかし、仮説を確実に証明するにはまだいくつか調査データを踏まえ検討しなければならないことや、追証のためになすべき新たな実験研究がある。論文の最後に、取りあえず、今後なすべきと考えている３つの研究課題について書き留めておくことにしたい。

１つ目は、乳幼児期のテレビ視聴と小学校入学後の社会力および学力との関連性について吟味と確認を行う必要があるということである。本論文ではまったく触れず、それゆえデータを示すことはしなかったが、母親のテレビ視聴に対する考え方、例えば、「内容の優れた番組をみせると子どもが利口になり、学校に入るといい成績を取るようになる」というような一見もっともな考えは、東海村の調査では、むしろ逆効果であることを示唆する結果がえられた。内容の良し悪しにかかわらず、乳児期から長時間テレビを見続けた子どもは、小学校１年生の後半頃から成績の差となって表れるということである。長野県では2005年４月から、「０歳からの信州っ子育ちのために」という標語を掲げ、０歳から社会力を育てる子育て運動を展開し始めた[5)]。就学前に社会力を育ち損ねると、小学校入学以降の意図的な教育が意図通りの効果をあげることができない、という認識に立ってのことである。ともあれ、乳幼児期における社会力の育成とテレビ視聴との関連と、小学校入学以降の社会力と学力の関連については、確かな証拠にもとづいた研究と検証がなされるべきである。

２つ目は、わが国の子どもたちについて言えば、学年が上になるにつれ社会力が低下していくのはどうしてか、その訳を解き明かす必要があるということである。25年前（1980年）、筆者は総理府の「子供と母親の国際比較調査」を行ったことがある。その調査の中で、児童生徒の自信度を測定する調査項目を作成し、日本を含む６カ国の自信度の比較を行った結果、イギリス、フランス、タイ、韓国、アメリカの他の５カ国の子どもたちが長ずるにつれ自信度を高めていくのに対し、わが国の児童生徒だけが学年が上になるにつれ自信度を低下させていくことを確認した。そして、自信度の低下は学校の成績の低下とほぼ相関関係にあることも確認している[6)]。そして、今回の東海村調査で確認できたことは社会力もまた学年が上になるにつれ低下していくことであった。自分に対する自信と、学校の成績と、社会力の間にどのような相関があるのか、また、何ゆえに、わが国では、学校で教育を受ける期間が長くなるにつれ、自信（自己肯定感）と成績（学力）と社会力が低下していくのか。このような傾向がわが国の児童生徒に顕著にみられることは、わが国の学校教育が成功していないことを物語るものである。とすれば、わが国の学校教育のどこに問題があるのか。このような疑問につい

ても、確かな証拠を示しながら原因を解明する必要がある。

そして、最後の３つ目であるが、社会力のある子はなぜ成績もよくなるのか、その訳を科学的に解明することである。科学的に解明するとしたが、具体的には近年著しい進歩を遂げている脳科学の研究方法を用いた実験によって、社会力（社会的知能）と成績（知的知能）との間のプラスの相関を突き止めることである。脳科学研究のこれまでの研究成果を総合すれば、高度な社会的知能がそのまま高い知的知能でもあることを説明する理論を構築するのはさほど難しいことではない[7)]。しかし、学力一辺倒に堕しているわが国の今日の教育状況を一変させるには、ただ理屈（理論）を言うだけでなく、脳の高い社会的知能が高度な知的機能を発揮していることを、例えば、fMRI（磁気共鳴画像撮影法）を用いた実験を行うことによって脳の働きの動かぬ証拠写真を撮り、それを突きつけることで教育関係者に有無を言わせず納得させる必要がある、ということである[8)]。筆者は、現在、産業技術総合研究所の「脳科学と教育」研究プロジェクトチーム（代表：仁木和久氏）の共同研究者の一員でもある。こうした立場を活かして上記のような実験研究を実行し画期的な成果をあげ、わが国の教育状況を一新することに貢献したいと考えていることを開陳し本論の結びとしたい。

＜註＞

１）そうした指摘や主張をした論文・著書はかなりの数に上るが、初期の論文を一書にまとめたのが『若者と子供の＜異界＞』（1992年、東洋館出版社）である。

２）文部科学省『情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会報告書』（2005年、文部科学省初等中等教育局）

３）詳しくは、拙著『子どもの社会力』（1999年、岩波書店）、『親と子の社会力』（2003年、朝日新聞社）など、社会力シリーズ本を参照されたい。

４）学習研究社『学研版・小学生白書（2000-2001年版）』（2001年、学習研究社）、拙著『社会力が危ない！』（2001年、学習研究社）、『社会力がよくわかる本』（2005年、学事出版）。

５）長野県幼児教育連絡会議『０歳からの信州っ子育ちのために』（2004年、長野県教育委員会）

６）総理府『国際比較・日本の子供と母親』（1981年、総理府青少年対策本部）

７）筆者の仮説を傍証する理論や実験結果を展開しているのは茂木健一郎、澤田俊之、仁木和久氏ら脳科学者たちである。その一端は、次のような記述となって公表されている。

「相手の心を読み取る能力を心の理論という。高度に発達した社会と文化を持つ人間の能力を考える上で、心の理論を支える脳のモジュールはきわめて重要な役割を担っている。」「社会の中の対人関係における不確実性から学べることは多い。他者の心は、もっとも不確実なものの一つである。」「取り立ててどうということもない会話も、それがどのように成り立っているかを分析すると、そこには、私たちの脳の秘めている素晴らしい能力が浮かび上がってくる。」（茂木健一郎『脳と創造性』2005年、PHP 研究所）。

「人類の最も基本的な社会戦略は、集団内のメンバーが互いに利他的行動をしあうことで集団内のメンバーたちの適応度を総体的に高める戦略としての共恵戦略（co-benefit strategy）なのである。この戦略こそがまさにヒトを人間たらしめているといってよい。ヒトが高度に発達させた共感（sympathy/empathy）もこの戦略と結びついており、この機能は前頭連合野が担っている。』（澤口俊之『HQ 論：人間性の脳科学』2005年、海鳴社）

「社会力は社会的・知的行動力である。人間の行動は社会的環境のもとで行われる。多くの情報源が社会環境であり、文化ミームであ

る。言語・概念の抽象化や精緻化は、はじめから抽象的な思考機能として存在したわけではなく、社会集団内での具体的なコミュニケーション過程の中での情報や知識の共有化現象として理解すべきである。社会において実際に認知的活動を行い、対話し、知識の交換、共有過程が組み込まれている必要があり、それが自然な学びを引き起こす。社会力を教育の対象とすべき！」（仁木和久「脳認知科学と教育の対話」『初等理科教育』第39巻８号、2005年、東洋館出版社）

８）例えば、脳科学者・川島隆太氏は、fMRI を用いた実験によって単純計算や音読が脳の前頭連合野を活性化させている写真を撮影し、それをもとに本（『自分の脳を自分で育てる』2001年、くもん出版）、『読み・書き・計算が子どもの脳を育てる』（2002年、子どもの未来社）を著したり、教材を開発したりして教育現場に多大な影響を与えている。

但し、脳科学のこのような“活用”については慎重になるべきであるという警告があること（例えば、伊藤正男他「徹底討論・脳科学は教育を変えるか」『世界』2005年11月号）を十分意識しなければならないのはいうまでもない。